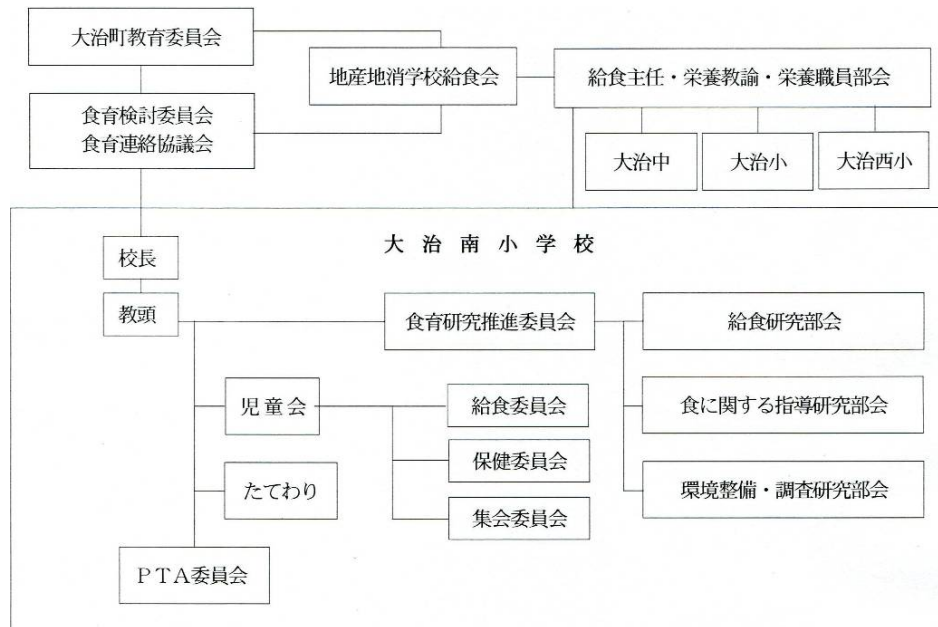


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	愛知県
推進地域名	大治町

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 給食を中心とした食に関する指導の充実のための取組

1 全校での「給食時間の展開」の見直し

- ・ 担任は、児童が主体的に活動できるようにサポートした。
- ・ 給食時計で給食時間の流れを確認しながら給食を食べた。
- ・ 学年内で交流給食を実施し、担任が別のクラスの給食指導を担当して他のクラスのよい点を取り入れた。

2 栄養教諭による個別指導

- ・ 食生活チェックシートを職員が共有し、個別での声かけが必要な児童を把握した。
- ・ 栄養教諭が給食時間に各クラスを訪れ、「苦手な食べ物も一口は食べよう」と声をかけた。
- ・ 食物アレルギーの児童については、保護者や担任と事前に話し合い、給食材料や作業工程に気を配り、事故が起こらないよう配慮した。



【給食時計】

3 異学年交流給食やたてわり給食の実施

(1) 異学年交流給食 (4/28)

1年生と5年生が交流給食を実施した。5年生が、1年生にどうしたら喜んでもらえるかを考えたり、事前に会食時の話題を考えたりすることで楽しく会食ができた。

(2) たてわり給食 (6/22～6/25) (10/27～11/1)

各学年を4色に分け、色ごとに4日間にわたり「たてわり給食」を行った。6年生は会食前のゲームの企画、配膳から司会進行まで担当し、他学年(2～5年生)も決められた役割を担当した。高学年児童が低学年児童の配膳や食事の世話をするなど、好ましい人間関係を作る様子が見られた。



【たてわり給食】

4 児童会活動

(1) 給食委員会の活動

給食委員会の常時活動として、毎週金曜日にワゴンの点検をしたり、委員会日には、給食のゴミを入れるダスターポットを作ったりした。また、学期に1回「残さいゼロ作戦」を行い、実施前には朝礼で全児童に食べ残さないように呼びかけた。残さいが少ない学級を朝礼で表彰した。

(2) 食育集会

集会委員会、給食委員会、児童会役員の児童による食育集会「ありがとうおいしい給食」を行った。「食生活に関するアンケート」の集計結果を発表したり、給食に関するクイズを行ったりした。また、給食に出る作物を育てている生産者の方の思いや、調理員さんが給食をおいしく食べてもらえるように調理している気持ちを伝えることができた。

テーマ2 各教科等における食に関する指導の充実のための取組

1 教科間の関連をもたせた、各教科等における食に関する指導

- 各学年で、食に関する研究授業（中間報告書に記載）を行い、学年の他のクラスでも同じ指導案で実施した。
- 学級活動や家庭科、体育以外にも、道徳、国語、社会等で食に関する指導を行い、研究協議を行った。



【2年 道徳】



【3年 国語】



【5年 社会】

2 全学年での栽培活動

- 全学年で栽培活動を行い、作物を育てる大変さや収穫する喜びを体感した。また、収穫した野菜や米で調理をしたり、給食に使用したりして食べた。



【2年 新鮮レタスでレタスパパーティ】



【3年 夏野菜でピザ作り】



【4年 育てたゴーヤを給食で使用】

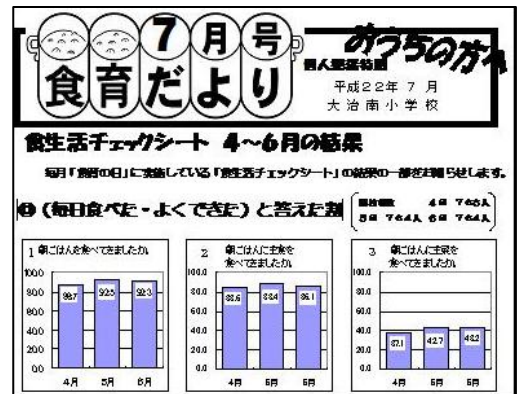
3 毎月食育の日に「食育チェックシート」を実施

- 児童が自己の食生活を見つめることで、食生活の改善をめざした。

食生活チェックシート		3年3組			
月/日	◎できた	◎できた	◎だいたいできた	◎だいたいできた	
1 朝ごはんを食べてきましたか。	◎	◎	◎	◎	
2 朝ごはんには主食(ご飯・パンなど)を食べてきましたか。	◎	◎	◎	◎	
3 朝ごはんには主菜(魚・卵・納豆・肉など)を食べてきましたか。	△	△	△	◎	
4 朝ごはんには副菜(野菜・果物)を食べてきましたか。	△	△	◎	◎	
5 給食は残さず食べることができましたか。	△	◎	◎	◎	

【食生活チェックシート】

10項目の質問の集計結果を、教室掲示や、食育だよりで知らせた。毎月実施することで朝食の内容や、給食を残さず食べることを意識することができた。



【食育だより】

テーマ3 家庭・地域との連携による食に関する指導のための取組

1 保護者を対象とした給食試食会の実施

- 1年生保護者対象給食試食会(5/26~28)
- 全学年対象PTA給食試食会(9/17)
栄養教諭の講話、試食会、参観を通して、学校給食の役割や、栄養・衛生管理について理解していただくことができた。



【1年生試食会】

2 招待給食の実施

- 食育の日に、給食に野菜を提供していただいている「大治町地産地消学校給食会」の方を2年生の4学級に1人ずつ招いて会食した。
- 全国学校給食週間中に、米作りや、米粉パン作り等でお世話になった方々を5年生の4学級に1人ずつ招いて会食した。



【食育の日の会食】

3 家庭からの献立募集「我が家の自慢料理 食べてもりもり力こぶ」の実施

入賞した献立を給食のメニューとして取り入れた。児童がよい生活のリズムを作り、健やかに成長していく上で、家庭での食環境が大切であることを理解してもらうために取り組んだ。親子で相談し応募することで、この取組が、児童だけでなく、保護者にとっても身近なものとなった。

4 食育だよりやホームページでの取組の発信

【食育だより】

【ホームページ】

テーマ1～3に共通する具体的計画

1 食育検討委員会・食育連絡協議会の開催(年3回)

事業を推進するにあたり、検討委員会を組織した。委員会のメンバーは、大学教授、県教育委員会担当者、海部事務所担当者、町教育委員会担当者、中心校の校長、教頭、関係職員、PTA役員、生産者等で構成した。

食育連絡協議会は、検討委員会の協議事項を具体的に推進する機関で、町教育委員会、協力校の校長、中心校の校長、教頭、関係職員、PTA役員、生産者等で構成した。

2 食生活に関するアンケートの実施

学校給食と食に関する調査を全校児童とその保護者を対象に2回実施し、食育に対する意識の変化などを調査、分析し、食の指導に役立てた。

3 食育の先進校の視察

4 大治町教職員研修会において食育に関する中間発表と講演会の実施

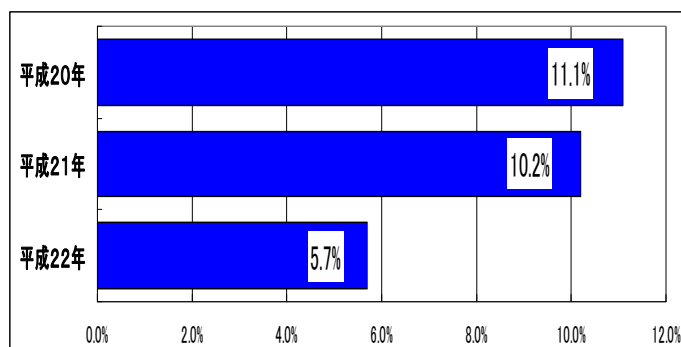
- 講演「今、求められているのは『食』育」(名古屋学芸大学大学院教授：足立己幸)

5 平成22年度食育指導者養成講座(愛知県教育委員会主催)での実践発表

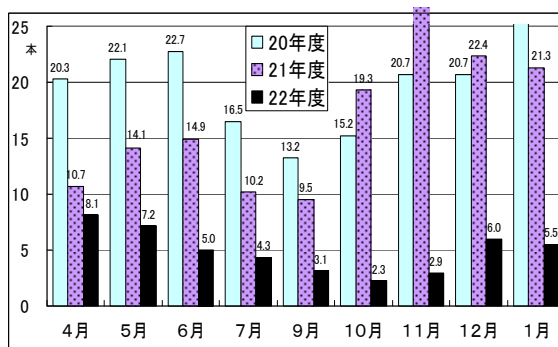
- 6 海部地方現職教育研究発表会での発表や環流活動
- 7 愛知県学校給食優良学校実地審査・表彰
- 8 全国食育連絡協議会（文部科学省）への参加
- 9 愛知県「子ども食育推進シンポジウム」にて実践の紹介
- 10 食育報告書・食育リーフレットの各関係機関への配布

数字で変化のあった事項について

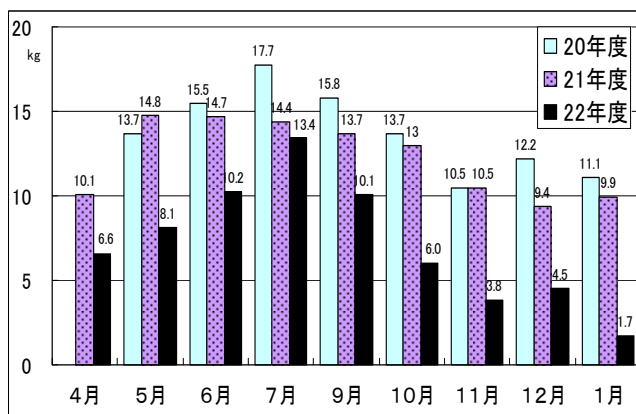
1 給食について



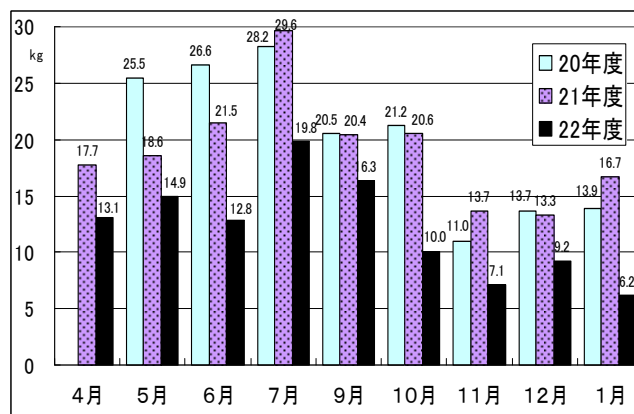
【給食で嫌いな物が出たら食べない」と答えた割合】



【牛乳の飲み残し（欠席者分を含む）】

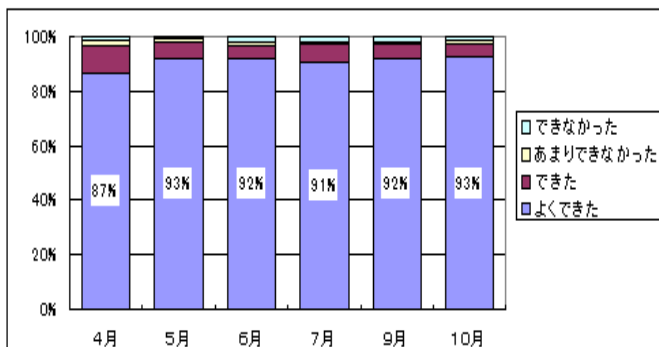


【主食の食べ残し】

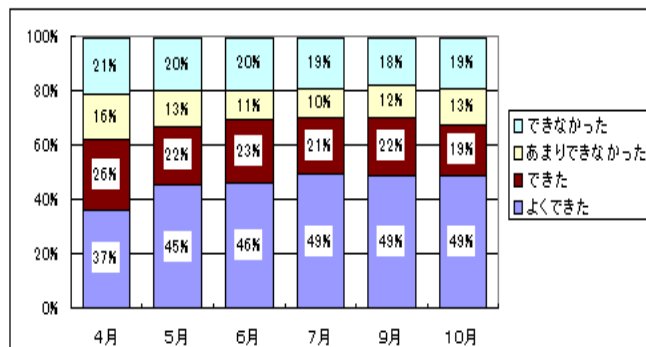


【副食の食べ残し】

2 朝食について（食生活チェックシートの結果）



【朝食を毎日食べるのができた】



【朝食で野菜のおかずを食べてきたか】

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

給食時間の展開の見直し

- 「給食時間の展開」はこれまでも毎年4月に職員会で提案されてきたが、各クラスの担任に任されている部分が多く、提案後に見直されることは少なかった。今年度は、他の職員が指導をしたり、進級で担任が替わったりする時でも、同じような指導ができるように、給食時間の過ごし方を改めて全職員で見直し、統一に努めた。
- 「見直し→実施→見直し」を繰り返すことで、無理の無い内容にすることができた。低学年と高学年で時間を変えるなど、実態に合わせた時間配分にした。
- 各教室に給食時計を設置したり、校内放送を工夫したりすることで、児童が給食時間の流れが理解できるように努めた。
- 担任が他のクラスに入って給食指導する「交流給食」では、他のクラスの工夫やよい点など、学ぶことが多くあった。交流給食後は、それまで気付かなかった指導の違いや偏食傾向のある児童が、職員間の話題に上り、学年間での共通理解につながった。

給食の食べ残しの減少につながった取組

- 給食委員会の「残さいゼロ作戦」は、毎年実施してきた。これまでも表彰されることを目標にクラスで協力して食べる姿が見られたが、期間が終わると再び食べ残しが増えることも多かった。今年度は、継続して「完食しよう」という気持ちを持ち続けることができ、1学期、2学期、3学期と食べ残しが徐々に減少した。
- 「賞状が欲しい」という気持ちだけでなく、食育集会や授業で調理員からのメッセージを聞いたり、生産者との交流で野菜作りの苦労を知ったりすることで、感謝の気持ちをもって残さず食べようとすることができた。
- 栽培活動を通して、野菜に対して愛着をもち、サラダや和え物のお代わりにする児童が増えた。
- 各担任が給食指導を熱心に行い、クラス全体で食べ残しを減らそうという気持ちを盛り上げることができた。

研究授業の実施

- 各学年で「関連学習構想図」を作成し、学年の食育の目標と照らし合わせながら、それぞれの授業のねらいや内容を考えることで、系統立った指導ができた。
- 各学年で年間3回の食に関する研究授業を行った。同学年の職員が事前・事後に検を重ね、研究授業以外にもそれぞれの授業を互いに見合うことで、職員の授業技術の向上につながった。
- 栄養教諭が指導案の検討や指導方法、教材の工夫等に参画することで、児童の食生活の改善、食事のマナー、栄養素の理解等の食への理解と定着に繋がった。

栽培活動・生産者との交流

- 全学年で野菜の栽培活動を行った。夏の猛暑、冬の降雪により、思ったように育たない作物も多く、折れたり、枯れたりする体験を通し、栽培の難しさを知り、生産者からのアドバイスを真剣に聞くことができた。
- 収穫した野菜を調理したことを家の人に話したり、家に持ち帰ったりすることで、児童たちが食のメッセージとなり、学校での食の取組や情報を家庭に送り届けることができた。
- 栄養教諭がコーディネーターとなって生産者の方々に栽培活動への協力を仰ぎ、授業への参画や会食の機会を増やしたことで、児童と生産者との交流が深まり、進んで野菜を食べようとする意欲が高まった。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

1 継続的な指導体制の確立

- テーマ1～3の3つの柱をもとに食に関する指導を行ってきた結果、児童の食への意識は確実に変わってきた。児童の食に関する意識の高まりや知識を食習慣の改善につなげていくには、6年間を見通した継続的な働きかけが今後必要である。

2 家庭・地域との一層の連携

- 学校、学年等での様々な食に関する活動を通して、児童の食に関する意識を高め、知識も深めてきた。児童の食に関する意識の高まりが日常の食生活への改善につながってはじめて、「心身ともに健康な子どもの育成」が達成されると考える。そのためには、学校での食への取組を家庭や地域に向け情報発信を今まで以上に行うとともに、保護者を巻き込んだ学校の食育体制を確立していく必要がある。